
日常を、いかにして楽しむか

yuma.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常を、いかにして楽しむか

【Nコード】

N0624B

【作者名】

yuma .

【あらすじ】

無機質に繰り返される日常、機械的に同じリズムで刻まれる日常。それが当たり前のことだけれど、どうやら僕の周りにはそれを良しとしないヤツばかりで…

01：夕暮れと才能とポリシーと（前書き）

初投稿です。ジャンル分けをどうしようか滅茶苦茶迷いました…し
ようもない文章ですが、ご意見ご指摘ご感想、お待ちしております。

01：夕暮れと才能とポリシーと

夏休みが終わると共に夏もひと段落したようで、連日嫌がらせのようにつながっていた夕子の悪い暑さもやっとのことで和らぎ、吹き抜ける風は涼しさを運び、随分と過ごしやすくなった。そんな、2学期が始まって間もない9月。

夏休み明けのダルダルテンションを引きずり、授業にもイマイチ気合が入らず、薄らばんやりとした思考回路のまま本日の課程は終了し、時は放課後夕暮れ時。人気の無くなった教室。不意に問いかけられる。

「エースケは、『才能』って言葉をどう定義する？」

意図の分からない質問に僕は首を傾げ、次いで質問の主を訝しげに見る。

ふじさき ほくと
藤崎北斗。

全体的に小柄で、顔立ちは「可愛い」という比喻がピッタリと当てはまる。幸い北斗にその気はないようだが、女装すれば全国の女子高生と比べても、ランキング的に上のは間違いないと思う。いつもニコニコと、人当たりもいいやつなのだが、どうにも喰えない所がある。高校からの付き合いなのでかれこれもう2年になるが、未だに底というものを見たことがない。常に邪気のない笑顔を浮かべちゃいるが、腹の内じゃ何を考えているのか分かったものじゃない。

「いきなり何を」

「いいから。『才能』って、エースケはどんなものだと思う？」

僕を見据え、再び質問をする北斗。笑顔がやたらと楽しそうに見える。

「才能ねえ……いざ聞かれると返答には詰まるな」

北斗のことだ、『物事を理解して処理する、頭の働きと能力』なん

て模範解答のようなものを期待している訳ではあるまい。

「ちよつと難しいかな？」

「難しい、というよりはお前の期待しているような解答は紡げそうにないな」

「なるほど。・・・でもね、俺の考えとしては、エースケのポリシーそのものだって才能だと思うけど」

僕のポリシー。

まあ、ポリシーと言って言えなくもないのだが、そんな大それたものでもあるまい。流儀というかスタイルというか、こだわり。そんな感じだ。

「分からないことを分からないままにできるってのは、意外と凄いことだよ。『疑問に思ったことをそのままにできる才能』。好奇心旺盛な10代とは思えない」
放つとけ。

心の中で呟く。

「俺には不思議でしょうがないよ。エースケは、知りたいと思わないの？ 答えを出したくはないの？」

「思わないね」

「どうして」

「過剰な好奇心は身を滅ぼすだけだ。世の中には、知らないほうがいいことだってあるんだよ。分からないこと、不思議なこと、知りたいと思つたこと、全部を全部解き明かしていけば必ず、見なくなつていいものまで見えてくる。そういうのは勘弁だ」

僕の言葉に北斗は一瞬フリーズしたが、すぐに笑顔に戻り、笑い出す。

はて。笑いを誘うようなセリフを吐いたつもりはないのだが。

「つまりエースケは臆病者つてことだね」

「かもな」

そう言つて、僕も少しだけ笑う。

窓の外に目をやると、夕日でオレンジ色に染め上げられた街が目

入る。

普段はゴミゴミした街でも、こうしてみるとなかなか綺麗だ。

北斗が携帯を取り出して声を上げる。

「おっと。もうこんな時間だ。俺、そろそろ行くね」

「おう。部活か？」

「うん。今は結構忙しい時期だね。夏休み明けでネタがゴロゴロ転がってるんだ」

ちなみに北斗は新聞部。イメージとの相違は否めないがそこはそれ。本人が楽しんでやっているのだよしとする。

「そうか。頑張れよ」

「うん。エースケもね」

意味ありげに微笑みつつ、立ち去る北斗。

「・・・・・・？ああ」

北斗の後ろ姿を見つめる僕の頭上にはハテナマークが浮上する。

訳の分からぬまま僕も携帯を取り出し、時刻を確認。

/ 9月3日 Tue PM 4:34 /

ふむ。僕も一応部活が無くはないのだが、幽霊部員でしかない。基本的な流れとしてこのまま家に帰るのがセオリーと言えるだろう。だがしかし、家に帰ったからといって別に僕を待っているものなど何も無い。

無趣味な人間の辛いところだ。

まあいい。途中で本屋に寄って、文庫本でも2、3冊購入するとしてよう。読みたい本など見当もつかないが、暇潰しにはなるだろう。ため息を一つ吐き、僕はバッグを引っつかみ教室を後にした。

02：憂鬱な放課後

吹奏楽部の奏でる乾いたメロディーを聴きながら僕は廊下を歩く。何度か耳にしたことのある邦楽だったが、曲名までは思い出せない。割とメジャーどころだった気がするのだけれど。

私立七鳥^{なとり}学園。一応名門校で通っているウチの学園は、レベル的に言っても県内でトップクラスだ。主に進学に力を入れていて、それなりに結果も出しているのだが、僕は今でも半信半疑だ。何故か。教師も生徒も異常なくらいにお気楽なのだ。入学当初、僕はここが本当に有名な七鳥学園なのか疑ってやまなかつた。それとも、僕が知らないだけで、名門校ってどこでもこんなものなのだろうか。この学園の「七鳥」なのだが、学園がある市の名前も「七鳥」である。単純に市の名前から取っただけ、とも考えられるが、どうもそんなシンプルなものではないらしい。

学園と市、同じ「七鳥」ではあるのだが、由来は全く別物と聞いたことがある。偶然にしちやあ出来すぎた話なのでかなり眉唾ものだ。恐らく後に出来た学園の方が市のネーミングに乗っかる形となったのだろう。市の「七鳥」の由来について僕は知らないが、学園の方の「七鳥」についてはある程度の知識はある。まあ、データベースは北斗だと素直に白状しておく。

この学園が創立何年目を迎えるのか、僕の記憶能力が正しければ、確か戦後間もなくこの学園は創られたはずだ。で、その創始者というのが何と驚き七人もいた。そりゃこれだけ大きな学園だ、個人で建てるにはかなりキツイものがあるのは分からんでもないが、七人は多すぎだろ、と素直に突っ込んでおく。そして更にサプライズ、その七人には全員名字に鳥の名前が入っていたという。最早ここま

でくると偶然どころの話ではなくて、軽い奇跡のレベルだ。事実だと言われても信じられない理不尽さは拭えないのだが、その七人の子孫が全員今現在も存在している以上、信じざるを得まい。もしかすると遊び心も含めて鳥の含まれた名字の人だけが集まって学園が創られたのかもしれない。・・・考えただけでおかしな話だが七人の創立者の内、代表格で今もなお七つの名家の頂点に君臨する政治界の重鎮、鷹宮家。

戦後の破綻した経済を一気に先進国のそれにまで引き上げた経済界の革命家、鷺塚家。

日本産業を世界でも屈指の技術に育て、進化させたトップメーカーの鳩岸家。

古来より伝統ある武術を重んじる武道の殿堂、燕城家。

価値ある美術品を数多世に送り出した芸術界の名門、鶴沢家。

膨大な敷地面積を誇り、代々農業で名を馳せる日本農業の統率者、鴨井家。

歴史に名を残すほど飛び抜けた才人を、数多く生み出した天才の血統、烏羽家。

並べてみるともの凄い顔ぶれだ。この七つの名家から出た著名人有名人は枚挙にいとまがない。これが僕の知っている七鳥学園についての概要だ。

吹奏楽の音が止んでいる。休憩時間だろうか。1階の踊り場へ差し掛かったところで、掲示物を熱心に読みふける人物が目に入る。知り合いに似てなくもなかったが、もしその読みが当たっていれば面倒なことになるので、僕は声をかけず素通りするという選択肢を選んだ。

のだが。

「あれ？エースケじゃん」

その人物が振り返り、声をかける。

幸か不幸か予感的の中。刹那、僕の憂鬱さ加減は一気に加速する。

「今帰り？一緒に帰ろうぜい」

視線の先にいるのは端整な顔をニヤニヤ笑いに歪ませる少女。

太刀川咲。(たちかわ さき)

女の子にしてはやや平均より上の身長、肩口までの髪が活発そうな印象を見る人に与える。入学当初から、コイツとは嫌な縁でしょっちゅう厄介事に巻き込まれる。しかもコイツは、僕と全く正反対の人間だ。分からないこと、不思議なこと、知りたいと思ったことがほんの少しでもあると、気が済むまで、なおかつ自分が納得できる解答にたどり着くまで追及をやめようとしなない。好奇心に手足が生えて歩き回っているようなやつなのだ。迷惑者以外の何者でもない。「どうせ暇でしょ？お茶ぐらい奢ってやるから、どっか寄ってこようよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

内心、僕はかなり焦っていた。コイツに付き合うとロクなことにならないのだ。それは僕の身体が、経験という名の嫌過ぎる根拠を持って確実に言えることである。

いくら暇だからとは言え、コイツに付き合うくらいなら家に帰って円周率でも暗記していた方が遥かに有意義だし、安全である。

「悪いな。僕はお前が思ってるほど暇な人間じゃないんだよ。残念だったな」

「円周率なんて暗記しようとしてるのにな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

心を読むなバカヤロウ。

咲のニヤニヤ笑いは更に意地の悪そうなオーラを帯びていく。まるで不思議の国のアリスに出てくるチェシャ猫ばりのニヤニヤ笑い。さながら僕は猫に追い詰められた鼠のような表情だっただろう。窮鼠猫を噛む、ということわざもあるけれど、僕はそんな勇氣のある鼠になれそうになかった。

吹奏楽部の練習が再開されたようで、再び軽やかなメロディーが校舎内に響き渡っていった……。

03：スルーすればいいものを

僕の意思の弱さは胸を張って、自身を持って、言える。

それは、押し弱さに関しても同じこと。

故に、咲に遭遇してしまった時点で、僕の命運は決定してしまっていたと言えるのかもしれない。完全無欠のマイペース、かつ鬼のような強引さを所有する咲を退けるのは、僕ごときヘツポコ野郎じゃ天地が引っくり返っても不可能だろう。

大通りから1本路地を抜けた所にある小洒落た喫茶店「ドロップ」。コーヒーの味の良さには定評のある喫茶店で、値段もリーズナブル。学生の財布にも優しい実に気の利いた店だ。僕も割とよく利用する。平日ではあるが、夕暮れ時という時間帯もあり、店内はなかなかの混雑具合だ。

僕と咲はカウンター席から通路を挟んで、窓際のボックス席に腰掛けている。

テーブルの上には、僕の前にコーヒー、咲の前にはコーヒーとケーキの皿が数枚。奢ってやる、と咲は言っていたが、僕には奢ってもらうつもりは毛頭ない。コイツに貸しを作ると後が怖いのだ。

「どうしたのエースケ？元氣ないね」

「いや、バリバリ元氣」

お前に会うまではな。

「そっか。それはともかく。・・・暇だねえ。何か面白いことねーかなあ」

咲がケーキをフォークで器用に切り崩し、口に運びつつそんなことを言いやがる。

やれやれ。コイツとは一生意見が合致しそうにないな。咲は常に、平々凡々で普遍的な日常にスパイスを求めようとする。退屈を毛嫌

いするタイプの人間だ。僕とは丸つきり正反対。さながら磁石のS極とN極、犬と猿、月と太陽。分かり合える日は来ないだろう。

「退屈な時間ほど貴重で尊いものはないさ。お前は退屈な日常のありがたみを知らないからそんな軽口が叩けるんだよ」

僕の言葉に、咲はフォークをくわえたまま両手を広げ、欧米の通販番組に出演する外国人のようなオーバリアクションをとる。

「エースケ。そんなことばかり言っていると早く老けるよ？ただでさえ年寄りじみてるし、陰気くせーし、根暗だし、負のオーラがふつふつと湧き上がってるんだからさ」

言いたい放題だな、オイ。

「そうやって無気力無関心気取って斜に構えてんのって、そんなに格好いいと思ってるの？少なくとも、私に言わせりゃバカみてえ。飽くなき好奇心と、潤い続ける探究心こそ青春ってもんだろーよ。

10代の素晴らしい時間を浪費してるよ、エースケは」
びし、とフォークを僕の目の前に突き出す。

僕は咲の熱弁に、心の中だけで喝采を送る。

「そうかもな。でも、これが僕のスタイルだ。譲るつもりは一切ない」

「わからず屋」

「どつちがだ」

そんなこんなのいつものやりとり。僕らにとってはおぎなりの会話だ。

僕は軽くため息を吐いた後、コーヒーを口に含む。相当に濃いのだが、苦味も酸味も感じない。ブラックなので邪魔されることは無いはずだ。なのにこのコクとキレ。流石だ。ちなみに僕は砂糖入りやミルク入りのコーヒーを蛇蝎のごとく忌み嫌っている。コーヒーは常にブラックオンリー。しかもかなり濃いのが好み。缶コーヒーのブラックはお湯にしか感じないね。

カランカラン、とドアの開く音。

入り口に目をやると、仲のよさげな一組の男女。カップルであるのは一目瞭然だ。

そのカップルはカウンターに腰を下ろし、顔見知りであろうマスターと話し始める。

「これはこれは。お久しぶりで」

マスターがにこやかな笑顔で話しかける。

それに物静かな雰囲気女性が笑顔で応じる。

「ええ。新婚旅行へ行っていたもので」

「ほほう。ご結婚なされたんで？」

祝福するような口調のマスターの言葉に、2人とも照れたような笑みを浮かべて頷く。

「新婚旅行はどちらへ？」

人の良さそうな男性が答える。

「北海道です」

次いで、女性も答える。

「フランスです」

マスターはなるほど、といった感じで目を細める。

「いい思い出になりましたか？」

「はい。当初はみんなに心配されていましたが。私、フランス語なんてさっぱりなので」

女性が恥ずかしそうに言う。

「ウチの両親なんか特に心配性なので大変でしたよ」
男性も楽しそうに語る。

「ははは。そうですね。まあ、いい思い出になったようですね。ゆっくりしてってください。ご注文は何にします？」

「.....」

「.....」

僕と咲の間に、沈黙が流れる。

はて。一体どういふことなのだろう。

最近の新婚旅行なんぞの事情に詳しいわけではないので滅多なことは言えないが、夫婦別々の場所に行くのが流行のスタイルなのだろうか。

「……バカバカしい。」

「……どういうことだろ。片方の人は再婚ってことかな？」

咲は声を落とし、囁くように言う。

僕も、それを真似る。

「まさか。それにしちゃ2人とも若すぎる」

問題の2人はどう頑張っても年上に見たところで、20代半ば。つまり相当に若い。一番高そうなのは大学卒業後に結婚した、という可能性だ。僕らと5才くらいしか違わないだろう。

それに、2人とも人の良さそうな雰囲気。離婚するようなタイプには見えない。まあ、離婚云々は相手との組み合わせにもよるだろうけど。

となると一体……

「……はっ！」

「……はっ！」

何をやっているんだ、僕は。

「ご自慢のモットーはどこへ行った？」

真面目に考える必要なんて全くないのに。スルーして、流しちゃう方がいいのに。

「……はずなのに。」

いつの間にか咲のペースに乗せられている。

「どうしたのエースケ？」

「いや別に」

「ちゃんと考えろよお。気になってしょうがないじゃん」

「……」

「おいコラ」

「……わかったよ」

ああ。どうして僕はこんなにも押しに弱いのだろう。もう少し意思

の強い人間になりたいな。

偉そうに信念だスタイルだポリシーだモットーだなどと抜かしちゃいるが、そんなもの、少しばかり強引なやつの前では塵屑同然。情けないことこの上ない。

僕はまたため息を一つ。

さて。

しょうがない、ちょっと考えてみますか……。

04：オレンジ色の街

再婚という考えが却下された今、次に考えられる可能性としては、1つの旅行プランの中に北海道とフランスの2つが組み込まれていたということ。しかし、そんなもの少し考えてみれば分かること、議論の余地なく却下だ。もしそれが本当なら、問いかけられた際に違う行き先を述べる必要はない。どちらかが嘘をついている、という可能性もなくはないが、これも却下だ。そんな必要性が欠片も見つからない。マスターに嘘をついたところである2人に得なことなど何一つないだろうし、マスターをからかって楽しむような2人でもないことは見ていれば分かる。何より、マスターはあの2人と顔見知りなのだから、全部分かっているはずだ。友人同士、という可能性もあるが、さっき男の人が「ウチの両親は……」って言うってたし。

となると……

僕は先ほどの会話を思い出す。

「全っ然わかんない。どういことだよ全く……」
ブツブツと呟いた挙句、咲は不機嫌になってしまった。あてつけのようにケーキをむさぼり喰う。

相変わらず、テンションの波の激しいやつだ。

僕も残り少なくなったコーヒーで一息。

少し思考がスッキリする。

ふむ……

難問、というよりは情報が少なすぎて不明瞭だ。大体、放っておけばいいのに咲のやつは……他人の会話からあれこれ詮索するのはあまり褒められた行動ではない。いや、今更言っても遅いけれど……。少々は誠さんを見習ってたんだ。

あ、ちなみに誠さんというのは咲のお兄さんで、もう咲と血が繋がっているとは思えないくらい真面目でクールで礼儀正しくて。リアルに存在する人の中で、数少ない、僕の尊敬する人だ。

「ここまで似てない兄妹も珍しい。」

あれ。

「そうか……。」

あった。もう一つ、男女の組み合わせとしてあり得るものが。

「ん。何さ、どうしたのエースケ？」

「兄妹」

「はい？」

「兄妹だよ」

「何言ってるの？エースケが兄貴のこと尊敬してんのは知ってつか
らさ、今はそんなことどうでもいいじゃん」

あからさまな嘲笑を浮かべ、僕を見る咲。

仕方ない、説明してやるとしよう。

「いいか？あの2人は夫婦じゃない。兄妹、もしくは姉弟だ。僕の
見方では兄妹だと思うが」

「ふえ？」

気の抜けた風船のような声を出す咲。

「そもそも、仲のいい男女を見ればカップルだと思う考え方が
間違いないんだ」

「私とエースケもそんな風に見られてたりして」

無視。

「そう考えると疑問は全て解ける。よくよく見てみりゃあの2人、
顔も雰囲気も似てるしな」

「……なる」

「兄妹揃って同じ時期に新婚旅行に行くってのもおかしい話だけど」
全く、紛らわしい。考える方の身にもなれってんだ。いや、別に考
えろなんて一言も言われてないが。ええ、ただのはた迷惑な好奇心

ですよ。

「さすがエースケ。見事疑問は氷解だね」

「不本意ではあるが、そうなったようだね」

こんな面倒なこと、二度とゴメンだね。

無駄な労力を使ってしまった。頭脳労働って案外疲れるんだぞ？

僕はコーヒーを飲み干し、立ち上がる。

「うし。そろそろ帰るか」

「だね」

そう言っつて、咲も立ち上がる。

僕は伝票を持ってレジへ向かおうとする咲を呼び止め、500円硬貨を握らせる。

僕はコーヒー1杯しか飲んでないけれど。500円あれば2杯は飲めるな。

「奢りっつて言っただじゃん」

「いいから、取っとけよ。本来なら女の子に払い持たせるのも男としてどうかと思うんだ」

「……………」

何だか呆然とした表情の咲。あんぐりと口を開けている。僕の口からそんな言葉が出たことに驚いているのだろう。

「まあ、建前だけだな」

その言葉に、ニヤリと頬を歪める咲。

「……………分かった。ありがたく受け取っとくよ」

「そうしてくれ」

帰宅途中、並んで歩いていたら咲が、不意に問いかけてくる。

「エースケ」

「何だ」

「今日のエースケは、やたら楽しそうだったね」

「……………そう見えたか？」

「うん」

「そっか」

訪れる静寂。

横にいる咲が、どんな表情を浮かべているかは分からない。
オレンジ色にきらめく街が、ひどく眩しく感じる。

「じゃ、また明日ね」

咲はそう言って、十字路を左に折れる。僕はここを直進なのだが、
生憎の赤信号。

「おう。また」

僕も静かに、それに応じる。

先ほど、頭をかすめた言葉。口には出さなかった。それで、いいん
だと思う。

いいんだと、思いたい。

「・・・前言撤回だな」

遠ざかる咲の背中を見つめながら、呟く。

こういうのも、たまには悪くない。

自分で言って、可笑しくなる。

お得意のポリシーはどこへやら。

でも、仕方ない。今日のこと、楽しくなかったと言えば嘘になるか
ら。

信号が青へ変わる。

僕は歩を進める。

歩き出す。

一歩、また一歩と、

オレンジ色の街を、進んでいく。

04：オレンジ色の街（後書き）

読んでいただきありがとうございます。ご意見ご指摘ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0624b/>

日常を、いかにして楽しむか

2010年10月9日07時21分発行